

放送人の会

No・40
2009・5・8

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一

賞が突然やってくる

「放送人グランプリ」のユニークさ

堀川とんこう

放送業界には大きな賞だけでも五つ六つある。文化庁の芸術祭賞、放批懇のギャラクシー賞、更に放送文化基金賞、ATP賞、民放連賞。ほかに「日韓中テレビフォーラム」や「地方

の時代映像祭」にもコンペや賞はある。

歴史の古いもの、できたばかりの新しいもの様々だが、共通しているのは、応募作品の中から選ばれるということだ。賞を取りたいと思ったら、応募しなければならぬ。定型の応募用紙を埋め、入賞したいという意思表示をしなければならぬ。

応募すれば当然審査結果を待つことになる。私にもさんざん経験があるが、結果を待つのはいやなものだ。最高賞でなくとも何とか引つかかってくれ、そうすれば視聴率がさほどでもなかったことの埋め合わせができる、とひそかに入賞を祈る。

その点、「放送人グランプリ」は実にいい。応募者はいないのだ。いやな気持ちで審査結果を待っている人はゼロである。芥川賞などのような候補

作の中間発表もないから、何と比較されたのか、何に勝ち何に負けたのか、ということもない。

「放送人グランプリ」は、青天の霹靂、不意に制作者を訪れる。

受賞お知らせの電話

去年と今年、受賞を知らせる電話をかけた。なにしろ突然の電話なのだから、「放送人の会」の何々と申しますが、と始めなければならぬが、「放送人ってなんですか？」と聞かれたことはない。「放送人の会」の知名度が上がっていることがわかる。

「えっ、本当ですか。賞が頂けるんですか!」「見てくれたんですか、私の番組!」

明るい声で叫ぶ人がいる。ああ、い人に差し上げたな、と思う。

「放送人グランプリ」が募集形式をとらず、従って面倒な応募手続きもなく、会員の一途な思い込み、独断偏見を恐れずに、いわばこっちの勝手に選んでいることは、実はとてもユニークで素敵なことだと改めて思う。

会員の鑑識眼

今年の会員からの推薦は総数 件で決して多いとはいえないが、推薦状の中身は去年同様とても濃かった。会

員の番組を見る目は鋭く、濃やかで、さすがにプロの集団という感じがした。後輩制作社への暖かい眼差しが感動的なものさえあった。

集まった推薦状を前にして、最終選考にあたって頂いたのは、河野尚行、藤久ミネ、石井彰、中町綾子の4氏である。中町さんは日本の先生で、若い人のドラマをよくご覧になっているというので、特別に加わっていただいた。

4月7日に選考委員会を開いて驚いた。このメンバーで、ラジオを含めた去年の話題作、注目作品を殆どカバーしてしまうのだ。皆さん大変なウォッチャーである。私自身もいくつかの賞がらみで大分見ているつもりだが、とてもとてもかなわない。

選考に当たって心がけたのは、この賞が会員の「放送に対する愛情」の表現でありたい、ということだった。放送がどんな状況下でも「倦まずたゆまず」「臆せず屈せず」、自らの質を高める努力をしてほしいと私たちは願っている。そのために、この人には「素晴らしい声がかかったですよ」とひと声かけておきたい、この人には「その線で頑張りを続けてください」と励ましたい。そんな思いが伝わるような贈賞でありたい。

5月16日の贈賞式には、今年も受賞者全員が駆けつけてくれる。会場で私達は受賞者の喜びの笑顔に会うことができる。みなさん、ぜひ総会にご出席を。



堀川とんこう氏

(放送人グランプリ 事務局長)

08 09の放送を語る 放送人の会・座談会

幹事会、イベント、事務局での作業などのもと、「放送人の会」はいつでも談話風

発である。「放送人グランプリ09」決定を前に、事務局での談話風発を採録した。

4月17日（金）午後3時、放送人の会事務局

出席 伊藤雅浩、鈴木典之、萩野靖乃、堀川とんこう、松尾羊一（50音順）

□放送人グランプリとは

X かつてテレビとラジオに直接かかわってきた立場から昨今の放送の現状を考え、併せて「放送人グランプリ」の立ち位置を明らかにしたいが…

Y 第三者的な評論家集団とも違い、視線はいまでも制作現場を意識しているわれわれの判断基準があるはずだ。

Z 本屋大賞であるだろう。全国の本屋さんの店員が「全国書店員が選んだいちばん売りたい本！」をキャッチコピーに、書評文化人とは違う視野からジャンルを問わず選ぶ。これが実績を重ねている。09年の今年は凄かなえのミステリー「告白」だったが、第1回が小川洋子「博士の愛した数式」、第3回が「東京タワー オカンとボクと、時々オトン」。各賞からは漏れた例えば伊坂幸太郎などは毎回ノミネートされている本屋大賞の星だ。

X たしかに放送人グランプリの性格はどこか本屋大賞に近いな。

Y ベストセラーねらいの出版界も視聴率拝跪の放送界もダメというのではなく、埋没した作品を掘り起こし励ます。いつてみれば無名刀を評価する勝小吉（勝海舟の父親）の目が今貴重なのだ。

Z 去年なら「デロンク」運命の犬ふたたび（NHK）、惜しまれて終わった「世

界ウルルン滞在記」（TBS）それと緒形拳の「帽子」、この三つをわしは挙げたい。

X 緒形がらみでぼくは池端俊策を推す。作風が地味で損をしている作家だが、「男」という生き物の生きざまと死にざまにこだわり続け、「羽田浦地獄」「百年の男」「翔ぶ男」「聖徳太子」、波紋を呼んだ「東条英機」…

Y ビートたけしで「大石内蔵助」と「東条英機」をプロデュースした八木康夫。東条の愚直性にかけて日本の悲劇。「一人のヒトラーも出ずに、大勢でこんなバカな40年をもった国があるだろうか」と悲憤慷慨したのは司馬遼太郎だった（この国のかたち）。

Z 元氣だったころの和田勉が「テレビ界は今に二人の勉が天下を取る」と言って今野勉を持ち上げたが「テレビの青春」は評価されている。

Y 代表幹事に受賞はどうも（笑い）

Z そのデンで言うなら八木と鶴橋「二人の康夫」だよ（笑い）

X 生と死をめぐるのがドラマだが、人間には病死、他殺、自殺、事故死とこの4つしかない。ところが「戦死」と「変死」をめぐるドラマがある。300万人を殺した今次大戦について「東条」を問うなら、平和時の「死」を取り仕切るのが「変死」だ。その変死の裏に何がある

のか。「警官の血」（テレビ朝日）がすごいのは、変死を犯罪に加工する組織の不気味さだ。鶴橋の視点の先に日本の闇が生き延びている。そこに触れているドラマだった。

Y その他バラエティーなどでは？

Z 最大のバラエティーが「草薙剛」の一件だ（爆笑）。忘れていか知らないのだが、昔「泉山三六事件」というのがあった（笑い）。泥酔の揚げく山下春江代議士に抱きつき、議事堂の庭に放尿した。「最低の人間」（鳩山総務大臣発言）

は大蔵大臣を棒に振った。あれと比べれば無害、ムジャキなもんさね。殺到した取材陣共演の大バラエティーに一票だ。

X メディアが作った「草薙」と実像としての草薙が同居して「一体オレってなんだろう」。そのアンビバレンツに耐えられず、いつか爆発する。それこそ草薙くん、裸一貫で出直しするつきやない。（笑い）

Y 大トラ大臣だって知名度が増し、後に参議院選挙に出馬、2度も当選した。

X つまり最大の場外バラエティー「草薙剛」を候補にしたい（笑い）

Y バラエティー自体がゴールデン枠でメルトダウンしているさまで、挙げるべき番組が不在だ。奮起を促したい。

□東京大空襲

Z TBSのドキュメンタリードラマ

「3月10日東京大空襲」は仲村トオルが主役で、東京大空襲のときカメラマンだった男を演じた。今残っている写真は彼が撮った30数枚しかない。これを中心にあの空襲はいつたい何だったのかを描く。これまで東京大空襲のドキュメンタリーはいくつかあるがこんな形のもの

はない。出来については問題なしとはしない。これが去年の3月。

X 東京生まれにとって、東京大空襲の話は原爆に比べて居心地が悪い。10何万人が死に、あれだけの被害なのだが何故か大声で言いきく。超低空で飛んでいたB29の映像は今でも夢に見る。群れをなすマグロのように腹をみせて通り過ぎる。最後の頃は焼夷弾がなくなつたのか、惜しくなつたのか、ドラム缶が電車道に落ちていた。後で米軍の資料を見ると焼夷弾を積む手間を惜しみ、そこらにあるドラム缶を積んで、B29からは足で蹴飛ばして投下した。なんという戦争をやっていたのだろう。

こんな話がかつてラジオの録音構成で番組にしようとした。話のうまさうな柳橋の芸者、話好きの大工などにマイクを向けたが喋ってくれない。本所、深川あたりは山の手と違つて借家がほとんどだから家が焼けて田舎へ行くと帰つて来られない。そんなこともあって東京大空襲はなかなか出来なかつた。最初に番組になつたのは野坂昭如の神戸大空襲だ。

Y 松浦総三や早乙女勝元が記録の仕事はやってきた。しかしテレビではこれまで印象に残る作品はなかつた。

X ETV特集の塩田純はどうだ。

Y 小田実、吉本隆明、加藤周一、埴谷雄高などを手がけた。戦後の単なる文学者、評論家でなく、時代に立ち向かった知性を取り上げている。活字でもあまりやっていないことを映像化する難しい仕事だ。

Z あえて言えばハイブロー過ぎる。

X 大正時代の白樺派、あるいは岩波文化の匂い。

Y 放送批評懇談会の月間賞で、昨年塩田の作品は6本入っている。12ヶ月のうち6本。最後には彼の個人賞があり計7本だ。こんな例はかつてない。

本人に聞いたが、殆ど自分で作ったものと他の人が作って深くかかわったもの、アドバイス程度にかかわったものといろいろあるとのことだ。

Z 塩田純はもともと「Nスペ」をやっている、前の放送グランプリの日中戦争の受賞のとき来ていた。

前には桜井均の下にいて、昭和天皇逝去の直後に「天皇の戦争責任」を作った。あれはよくできた作品で、そのあと大岡昇平の「レイテ戦記」をやった。

オーソドックスな作り手でNHKの上の方に鬱陶しがられた。塩田純の名前が出るのと抗議の電話があり、彼は自宅の住所、電話を明らかにしていない。そんなこともあってETV特集に移った。

ETV特集には最近報道番組部の制作も入ったが、塩田の扱うものが優れている。先日の多摩川の「一人と一匹」は報道番組部のものだ。

X ささまざまな意匠があつていい。「Nスペ」の奥アマゾンの裸で暮らす、1万年生活が変わっていない人間の原風景を見た。政府は天然記念物のようにこの種族の状態を保護していて、その政府の施策も見えて面白かった。

Y 撮影のときやむを得ず腰みのを女につけさせたり、男にパンツをはかせた。衣類や鍋釜などは政府が配給して持っていて、完全に1万年前の生活をしてはいない。しかし精霊と妊婦の関係など興味深かった。

Z 塩田の話に戻るが、大西巨人も取り上げた。殆どの人が大西巨人を知らない。しかし、そのほかにBC級戦犯をやった。特に2本目の大森がやった「罪に向き合うとき」は凄かった。今の「Nスペ」はスケールは大きいがハートがないから、中味がすけすけになる。ETV特集のものは作り手がやりたいものをやっていることがよくわかる。

「罪と向き合うとき」は戦犯として処刑された伯父の実像をインドネシアまで甥が追跡し、戦争犯罪に気付くというもの。日本人がもう一度原点から戦争を見つめなおす視線を持つている。

X 12月にやった「最後の戦犯」というNスペのドラマ。新克利が主演で、罪を認めたBC級戦犯が死刑をまぬかれ、自分の気持ちをどう整理するかを描いた。ストレートないドラマだった。これと「罪と向き合う」はテーマが同じだ。

Y 塩田が殆ど自分ひとりで作ったものに「日本国憲法誕生」焼け跡から生まれた憲法」がある。あれも優れた番組だった。2年前の作品だ。

Z 優れたプロデューサーは何人もいたが排除され、残った塩田にいい企画がまわってきている。

X 塩田は爆笑問題を使って「テレビ遺言」をやったことがある。湯川秀樹、石原裕次郎などをフラッシュ的にずらつと並べて迫力があつた。立花隆、糸井重里が議論に参加したが、その興奮がテレビ画面から伝わってきた。塩田はその路線を守ろうとしている。「日本国憲法」

など日本現代史のポイントを押さえるものもやるし、今も年間60本映画を映画館で見る映画青年で、映画監督も次々に紹介している。

それらを同時性、共時性、臨場感とかテレビにしかできない、そして自由な手法でやって、それぞれのテーマをしつかりとらえている。

Z ETV特集はそんなに視聴者に見られる番組ではない。問題を起こした従軍慰安婦の番組もこの枠で、NHKは潰したくしようがない番組だ。それが「ETV8」から「ETV特集」に番組名が変わった程度で生き延びている。

Y 昨年受賞した角氏は経済もの「アメリカ資本主義」をやっている。塩田、角の二人がNHKでは非常に目立つ。

戦後の知性

X 昨年、吉田直哉、筑紫哲也、村木良彦、緒形拳が死んでいる。この4人にも共通しているし、塩田が取り上げた戦後の知性にも共通するが、彼らは決して正統ではない。

江戸時代では、本居宣長は実は民俗学者だ。神道のなから「民俗」を発見した。彼の方法でやっていたのが加藤周一で、もつと積極的にやっていたのが筑紫哲也だ。音楽はロック、フォーク、沖縄、そしてステージなど旬の文化を紹介していた。緒形拳もテレビ、映画、舞台を通して他の役者とは違うものがあり、それは何かと考えると、昨年死んだ4人の中にはわれわれが置いてきた戦後知性の核があると思う。

村木良彦は「戦後文化の特長は知性が形容詞でなく動詞になったことだ」と言った。

Z そんな知性が随分死んだ。昨日ETV特集は鶴見俊輔をやったが80歳を越えている。佐野洋子をやるつもりだったが断られたそう。

X これらの人々はなぜか評判は良くない。小田実しかり、加藤周一しかり。

Y 顔がこわいのかな。

Z 川本三郎と右翼（鈴木邦男）の対談も面白かった。あんなところにも戦後知性というのはある。戦前の阿部次郎、宮本百合子などと違う大衆的な目線がある。

爆笑問題など

X 爆笑問題をどう思う？何かの賞の候補にならないか？

Y レギュラー番組が週に8本くらい。吉本でなくてメジャーになった数少ないお笑いだ。日大芸術学部卒で、自称ではビートたけし系。たけしは浅草の古い芸人の系統で、その末流だ。それはお笑いとして、「爆笑問題」は面白い。

Z はじめのうちね。東大、京大までで、慶応へ行ったあたりからつまらなくなった。

X デイレクターがよくない。あんなにやらせちゃいけないし、太田が喋りすぎだ。最近田中が前に出ているのは演出だ。あのホンを書いているのは田中で、太田は知ったかぶりの演技はやれるし、「向田邦子が、夏目漱石が」など利いた風なことは言えるが全体のまとめは田中だ。太田光の女房がマネージャーだが「田中さんにおまかせしています」という面白い関係だ。しかし、爆笑問題にわれわれが賞を出すというのはどんなものかな？

Y 「びったんこカンカン」の安住紳一郎アナはどうだろう。何をやらせてもはまる。

Z TBSは使いすぎだ。ちよつとんざりだ。

X アナウンサーではNHK「ためしてガッテン」の小野文恵。東大マスコミ学科卒。笑顔で賢い。

□幼児番組□

Y NHKでは幼児番組が面白い。

Z あれはかなり前から面白い。「にほんごであそぼ」「ピタゴラスイッチ」「夕方クイズネット」。平日午後4時から6時までは第3チャンネルを見ている。大人が見ても面白いバラエティーだ。

X 放送人の会はあれを一度表彰した(04年)。あそこには音楽、人形、コントなどいろんな才能が集まっている。

Y Pは中村哲史。武田鉄也にそっくりの男だ。

Z 民放がかつてやっていた子供番組のような子供におもねる感じがない。

X 子供を突き放し、ある意味で残酷だ。Y 斉藤隆を使い、芭蕉や一茶をわかるはずもない子供に読ませ、間にコニシキが入り、とこれまでの常識では乱暴なことをやっている。赤ん坊はテレビのCMにまず反応するそうだから、こんな番組があってもいいと、児童心理学から学んだのだろう。

Z 知的洗練を子供の脳に刷り込む番組だ。

X 先日は「パジャマでおじさま」をおじいさんにやらせて、子供がおじいさんを採点するのを見て驚いた。

Y 野村萬斎も染五郎も手を抜かず一所懸命だ。

Z 子供の番組では民教協が朝やつていて「生きる2」、これはじっくりして、長寿番組になれる。33の地方局のドキュメンタリーの作り手が集まって一所懸命に作っているからだ。

X あれは1970年のちよつと前、「親の目の目」という番組が始まりで、文部省が嗜んで、1本あたり300万円が出る。ローカル局のドキュメンタリー制作には使いきれないくらいのお金だ。しかし、始まるころの高度成長の時代にはキー局で引き受ける局がなかなか無く、テレビ朝日に全国のドキュメンタリー作者が集まり、岩間芳樹、早坂暁、藤井潔などの助言者が入ってコンペ形式で始まった。

□バラエティー□

Z バラエティーでは「ダーツの旅」。地図にダーツを投げて、刺さったところへ行く。あの番組は面白い。所ジョージが司会。

X かつてローカル局で民放コンクールで表彰されたことがある企画で、北海道テレビの「水曜どうです」でこの企画をやっていた。

Y 「釣瓶の家族に乾杯」がわざとらしくなくて、米倉涼子が出たりつまらなくなつたのに比べて、すつとぼけたディレクターがしろうとに「あなた独身？うちの娘はどう？」などとやられて、わけがわからず面白い。

Z テレビ番組の低俗化は歯止めがなく、テレビ局は社員の採用基準を変えたように思う。テレビの初期は筆記試験が非常に難しかったが、最近は面接だけで筆記試験では当たる番組を作るかどうかわからないという理由らしいが、そのことは各局の知的レベルを下けている。

X 出版界も同じだ。日本全体の文化産業の知的レベルは下がっている。

Z クイズ番組では「世界一受けたい授業」が面白い。脳の茂木健一郎、音楽の

青山広志、理科実験のでんじろうなど先住タレントが揃っている。

X 授業ではNHKの「課外授業・ようこそ先輩」が長寿番組でいまだに素晴らしい。

Y テレビマンユニオン、TBS映画社など教社のプロダクションが競作している。毎回専門家の専門領域が違い、毎回新鮮だ。その拡大版をE TV特集でやった。これが素晴らしかった。

X 子供がかわいそうな気がしないか？無理難題の宿題を出し、勝手な方法で教えている。

Y 「笑いが一番」がいい。単純なのが出演者がいつもいい。ふだんはテレビで見ることのない落語家や漫才師が出る。司会は林家正蔵と中川翔子。

□「篤姫」□

X ドラマはまず「篤姫」だろう。宮崎あおいを特別賞に推薦したい。

Y 彼女は賞を貰いすぎだ。

Z 今の「天地人」は原作をなぞっているだけでつまらない。原作にあるエピソードをつなぐだけでは学芸会だ。

X 「天地人」の原作はNHK出版がオリジナルで出した無名の作家のものだ。

Z 「篤姫」は田淵久美子が自分の心情、体験に基づいて全力投球した。それがドラマのリアリティーになっている。それを宮崎あおいが演技をこえた存在感で演じた。

X あれは名優なのだろうか？何だろう？

Y 憑依というか、つきものがついてるのだ。(笑)

Z あんな役者はいない。大竹しのぶや、デビューの頃の岸本加代子がそうだ。憑

依が脚本家にも演出家にも乗り移る。

X それと緒形拳が出た「帽子」「風のガーデン」、山田太一の「本当と嘘とテキーラ」「ありふれた奇跡」、井上由美子の「パンドラ」「春さらば」などを挙げたい。

□東条英機□

Y ドキュメンタリーの入ったドラマでは3月東京大空襲のドラマ、東条英樹の「あの戦争は何だったのか」。

Z あの東條のドラマはいやだ。あんな短い時間で東條を褒めることはない。東條は重大な戦争犯罪人だ。

X 別に褒めてはいないだろう。東條のほんくらぶりを描いている。

Z あの中で「東條はノット・ギルティだ」と言っている。間違はなく東條はギルティだ。あのドラマは日本人の判断を誤らせる。あれをたけしがやってはいけないのじゃないか。

X 当時、近衛内閣が行き詰まって次は誰がいいかという床屋談義、隣組の長屋談義で「東條さんがいい」という声があがっていた記憶がある。

Z あのドラマの中の東條に関するメッセージは何なのだろうか？

Y 「東條は無能だった」と池端は書き、鴨下は作っている。

X 無能な人間が天皇に忠誠を尽くした。この矛盾が日本を破滅させたというメッセージだ。

Z じゃ、天皇に責任がある？

X そこまでは言っていないが最終的にはそうだ。

Y 東條は参謀本部長と陸軍大臣を兼ねている。当時統帥権は内閣と離れた絶対の権限で東條はそれを握った。

4

Z そんな具合に細かく言っているうちに東條はノット・ギルティーになってしまう。

X 最後に徳富蘇峰を出して言わせている。

Z 西田敏行がうまくやればやるほどアジテーター東條にマスコミが操られたとか、東條の罪は見えなくなってしまう。

Y 私はそうは思わない。徳富蘇峰も卑怯だ、あんなことを言えた義理か、とのメッセージを受け取った。

Z あの仕事が池端俊策はいやだったそう。Pが八木だから断れなかった。彼は芸術祭文部科学大臣賞を受賞したが、「帽子」だけを対象にして東條ははずした。

X しかし東條のあのテーマは面白い。あんな矮小な器量の男が日本を支配し300万人が死ななければならなかったのか。

Z 彼を押し上げ、軍人が日本を牛耳るにいたる、2・26以降の数年か10年という流れがある。その中で東條が果たしてきた役割に触れなくてもよかつたのだろうか。開戦前の時点で開戦に消極的だったということで東條をヨイシヨシしている。冗談じゃない。

Y 東條は態度が決められなかったのだ。統帥権をバックに東條がやってきたことを近衛は東條の実力だと誤認した。彼なら軍を抑えられると考えた。総理大臣は統帥権から離れる。天皇には忠誠を尽くす。東條には決められないのだ。

Z 統帥権を言い出したのは石原莞爾だったか。「統帥権を持ち出せばみんな黙らせることができる」と統帥権を利用した軍人は悪くなかった、となるとヤバ

イ。ただあの番組の最後に近衛の末裔のご婦人が「とにかく軍人さんは戦争が好きですから」といった一言に救われた。

X あの番組はやはり東條は重い意味でギルティーだと描いている。開戦派を抑えると期待されたのに何にもできなかった罪だ。内容のない延々と続く会議を描いたのがあのドラマのツボだ。

Z 世代の差があるようだ。団塊の世代は彼らをドラマに取り上げるだけで許せないとの感情がある。

X いや昭和ヒトケタはもつと許せない。好悪の感情は別として、あのドラマはよくできている。政治の退廃がここま

で来ていたこと、貴族と官僚が軍人をどう抑えるか、平家物語の公家対武家の争いのような構図がよくみえた。

Y しかし、軍が大陸侵略を進め、戦線を拡大し、それを正当化してきたことへの反省がなければ中国や韓国への侵略に対する謝罪は誤魔化しでしかない。

□ドラマの映像処理□

Z 昨日「ボス」を見た。面白い。主演は天海祐希。警察をスピノフしてアメリカへ行き、ボスになって帰ってきた、いわば「相棒」の女性版。

X フジは独特のカメラワークを身につけている。各ショットが短く切換えが早い。

Y あれはハリウッドの流行をいち早く取り入れたものだ。例えばマトリックスとか。

Z それをまあ、うまくこなしている。しかしあれだけ切換えが早いと説明ができなくて、話が飛ぶ。極めてデジタル的なドラマ手法だ。「離婚弁護士」の延

長にあるドラマだ。みんな「ハゲタカ」林宏司のホンだ。

X かつてのスタジオ制作では、ワンカットの長さは物理的に短くはできなかった。今はカメラが小さくなり、編集が容易になってカットが小刻みにできる。

「ボス」を例にすると、パソコンに向かっている天海を短いカットの積み重ねでやろうとすると前後左右いろんな角度の画が必要だ。だから撮影には時間がかかる。その間天海はパソコンを操っているだけでたいした芝居はしていない。画がたいした芝居をするのだ。そのことで緊張感が高まる。

Y 「レッドクリフ」(赤壁の戦い)を見たが、あれはテレビゲームと全く同じだ。実際にオンラインのテレビゲームがある。ヒットしたらしいが、あんな画の繰り返しで面白いのかな。引きの画はほとんどCGだし、「三国志」はやはり英雄たちの話がなくて、と思うが、それはこちらが古くなってしまったことだろうか。

Z 今は一人の騎士、馬を撮影すれば編集で何人にも増殖できるためか、アクションシーンはワンパターンで驚きがなくなつた。黒澤明の「七人の侍」のような驚きと感動は望むべくもない。かつて「ローマ帝国の興亡」「十戒」ソ連映画のいくつかなどは何千人もの出演者と馬を使って撮影していた。これを最近の大型テレビ画面で見ると大迫力だが、CGでやるとちやちなものが出る。

□ラジオ□

X ラジオの夜中の3時にはRFラジオオニッポンが久世光彦の「マイ・ラストソング」をやっている。

Y FM福岡のラジオドラマで、裁判員制度で裁判員が集まって実際に裁判が終るまでを描いたものが優れていた。判決が出た後で裁判員が集まって「自分たちは間違っていたのではないか」と言うところで終わる。ちよつと不気味な終わり方だ。地元の役者で決しうまくはなく、ディレクターは社員じゃなくてフリーの人だ。

Y ラジオ・ドラマを作るのはほとんど社外で、社員は忙しいし、そんな志を持っていない。

□地デジを前に□

X 昨日の芝パークホテルのシンポジウムはNHK放送研究所主催「テレビのピンチとチャンス」と題するもので、テレビの今後を見通すなかなか面白い内容だった。2年後にテレビはアナログから地デジに完全移行する。それを国民の60%以上が疑問を持っていて対応していない。それを政策的、行政的にどうするのかを、総務省の局長、堺屋太一、竹中平蔵などが来て語った。

「地デジになるからこんなにテレビが面白くなりますよ。オトクですからどうぞ」という呼びかけがあまりにもなさ過ぎる、と堺屋太一は言う。地デジは期限を決めて進めるしかないと言行政も放送局も進めているが、テレビのコンテンツは弱体化しているのではないか、技術だけ地デジになってどうなんだ、と感じる。

Y NHKの4月改編は若者や女性層をひきつけるために、限りなく民放に近づいてきて、画面、アナウンサー、司会者のトーンなど見分けがつかなくなっている。かましいけどパワーダウンしている、というのが印象だ。

Z 先日から地デジの受像機を買うと何%引きとか、定額給付金に似た話が出ている。それをやると分かれば誰もが買い控える。メーカーは困っている。それでなくともぎりぎりまで買わない人が多いと思う。

X アメリカは実施を半年延ばした。日本も延ばさざるを得ないのではないかと議論も出たが、「延ばすと決まった途端に買い控えは先送りになるだけだ、期限は絶対に変えない」と総務省は言った。

Y 論点は「今のテレビの作り手には公共の意識が希薄になっているのではないか。かつてのバブル崩壊後、堺屋氏が経済企画庁長官として大蛇を振るい、その後を竹中平蔵が引きついでだが、その時の銀行は『出来る限りの改革をやっている』と言いつつ続けたが実は何にもやってはいなかった。それを行政が強権を持って介入して銀行の旧体質を壊した。それと同じことが今テレビ業界で起こっている。テレビは限界産業としての限界が見えていて、局側はあらゆる努力をしていると言っているが、外から見ると何の努力もしていない。バブル崩壊期の銀行と同じで、そこを突き破る動きがテレビ局の側から出てこなくてはいけない。テレビはリストラ・人件費削減を真剣に考えるべきではないか。経費削減が番組制作費削減だけに行われるのはおかしいのではないか。」といったところだ。

Z テレビ局は局の周りに遊園地や盛り場みたいなものを作って、あれが経営努力なのか。

Y 文芸春秋の自社ビルが出来たとき、当時の経営者は「これでわが社の経営は大丈夫だ。家賃収入だけでやっていける。

売れない本を作ってもいい、いい出版社になれる」と言ったそうだが、同じだ。

X 新聞では毎日とサンケイの統合がかなり現実味を帯びている。読売と朝日の話も聞こえる。それと連動してテレビもという話はあるそう。系列の中での統合とそれと両方進む。そのためにキール局は持ち株会社になっている。TBSホールディングスがTBSテレビを所有し、系列局を所有するという形だ。その中で地方の1県4局体制は崩れてくる。

Y そうした免許行政はかつて田中角栄の権力を生む道具だったが、今代議士や地方自治体の首長にとってどんなメリットがあるのだろうか？

Z 具体的に札束が積まれるかどうかは知らないが、大きな権益であることは確かだ。彼らは地上波にもBSにも血道をあげている。

X 外国の参入もありうる。マードックはうまく行かなかったが、これからはワバル化が含まれている。

Y 二つの局が、例えば日テレとTBSが役割分担しながら統合する、一つの波はニュースとスポーツ専門、一つの波はドラマと芸能専門、そんな風になった方がテレビは面白くなるかもしれない。

Z 法政の稲増教授が今日の東京新聞に「テレビのAMラジオ化が始まった」と書いている。今のテレビは東京オリンピック後の苦境時にラジオが編み出した方法に、コスト削減、1回こっきりで余分な費用をかけずに済む、という面だけで頼ろうとしている。「ひるおび」も「ザ・ニュース」も「サプライズ」もそう。ゴールデン・アワーはテレビの牙城でここだけは守ろうとしてきたが、こ

こも守れなくなってきた。

X 1960年ごろのラジオの革命を思い出すが、今のテレビの状況はスケールは違うがよく似ている。

ラジオの革命は危機の中を這いずり回ってパーソナリティ・生ワイドの中にクリエイティブなものを見つけて出したが、今のテレビは2年後が分かっているのに新しいクリエイティブを見出していない。

□公共性□

X 不況になると公共性なんか考えられないのではないか。その昔民放ラジオが始まる時は公共性など考えなくていいから、うまく運営できる、儲かる方法を考えろとされた。

Y 放送と通信の融合が言われたとき、テレビが牙城として守ってきた公共性はホリエモンの言うインターネットがあればテレビは要らないという議論の中に埋没してしまっただ。

Z 通信側の言う公共性は利便性だ。新しい便利なツールでアクセスや検索も自由だ、という利便性、それでみんなが楽をする、トクをする、それが彼らの公共性だ。

放送側の公共性は視聴者のためになることで、公共性と利便性はどこでござらぬとちやごちやになっている。公共性はメディアにとつて限界のある観念で、通信の利便性は使いたい人が使えばいいという観念だ。公共性については組織を作つてちゃんと議論をする必要がある。

X 昨日のシンポジウムで前川英樹氏は「国民が欲しがらるらう、欲しがりそうな情報をテレビは懸命に流そうとしている。しかし公共性とはそんなものじ

やない。国民が横を向いていても、これだけは伝えなくちゃいけないというものを伝えるのがジャーナリズムでありテレビの使命なのだ」と言った。

Z そのことを自覚してきちんと守れるか。しかもそれは権力から離れていないくなくてはならない。放送は民主主義そのものも殺してしまうことができる力を持っている。今、放送界の誰がそのことを自覚しているのか。それが公共性であり、ジャーナリズムの根幹だ。

X 昨年、朝日新聞が「NHK」という連載をやっていたが、あの中で川本記者が福地会長に公共性についてインタビューしていた。福地会長は「NHKは自民党にも野党にも文句を言われる。両方から言われるのだから公共性はある」と答えた。

(爆笑)
落語じゃないんだよ。

Y 公平性と間違えたんだね。
Z 大学院生じゃないからもう一度ハーバードマス(ユルゲン・ハーバードマス、1926)、哲学者、公共性論の第一人者)を読めとは言えない。どこかでちゃんと勉強していただくことにして、一般の公共性とNHKの公共性は分けて考えて欲しい。

A 堺屋太一は「権力に迎合するな、と言いが、それは違う。権力からも国民からも一定の距離のある主体性を持つべきだ」と言う。だから国民の口に苦い情報も伝えるべきなのだ。

以下、談論風発はあちらに飛び、こちらに戻りて延々と続いたが、採録はこのあたりで：

南船 北馬

判らない刑法の体系

加藤 迪

世の中の動きが早いので、お忘れの方も多いだろうが、草薙剛の事件は居酒屋論議の格好の議題だった。

たかが公園で裸になって騒いだけであ宅捜査はやり過ぎだとか、いや最近では芸能人に大麻汚染が広がっているの、警察のやり方も理解できるとかいいう話である。この議論を今更蒸し返すつもりはないが、監禁して抵抗もできない娘を金槌で殴り殺すような事件が溢れている時代に、警察も暇なものだ。この事件では大臣が激怒のあまり「最低の人間だ」と言ったり、取り消したりのおまけまでついた。

この頃、別の事件で最高裁の判決の報道が目をついた。殺されたのが一人しかいないのに情状酌量のない死刑判決を下したのは異例だというのである。そんな慣習があるなど露知らなかったが、稀にみる凶悪な事件だったのだから死刑は当然だろうと考えてはいけないうるのか。

本来、法や刑罰とは善悪に関する人々の共通理解が基になったものだから、専門家でなくとも、社会共通の価値体系に

則って大まかな判断は出来る筈のものである。ところが最近の事件ではそれがさっぱり判らない。違法行為とそれに対する社会の制裁の基準が揺らいでいるのだろうか。殆どの重罪事件は最高裁まで争われ、刑が確定してもなお、争いが取まらないことが多いのは、何かが間違っている。

どんな行為がどんな刑罰に相当するのか、それにはどんな根拠があるのか。裁判員制度も始まることだし、誰か一度この辺りを判り易く整理してもらえな

いだろうか。

北海道頑張れ

FM北海道

取締役経営管理室長 中田美知子

ラジオは弱者の味方と思っているが、日本を全国規模で見ると北海道は弱者である。拓銀崩壊以来失われた10年をまさに悪戦苦闘しながら北海道の企業は生きてきた。当たり前かもしれない。こ

こは、これまで国からの補助があり、お上の命令に従うことが生き延びる道と

教えられた土地なのだから、関が原の戦いに例をあげるまでもなく本州企業は

戦って勝ち取り、あるところは同盟を結び業績を伸ばしてきたのだ。しかしそう

も言っ

てはいられない。国からの援軍はもう来ない。まさに自立をかけた覚悟の時代が来ている。

一年間北海道の企業経営者に取材し、52本の番組を作った。その間リーマンショックがあり、百年に一度の不況が訪れた。だからラジオで「北海道頑張れ」と発信を続けた。往々にして経済番組は会

社の「よいしょ」になりがちだが、それはやめた。北海道活性化には何が必要と考えているかを本気で聞き続けた。人、もの、金が底をついたラジオ現場で純度の高い番組を作り続けたいというのは、何だか自分の羽をむしって機を織る鶴のような気分だったが、楽しかった。できたものは北海道への私なりの提言書である。『挑む』というタイトルで6月初旬に北海道新聞社から出版する。北海道の今を知る本としてお読み頂きたい。

南端と北端と

札幌テレビ 林 健嗣

あくまで私見なのだが、中心から外れているからこそ真の核心が見えるということがある。地方に生きることは、そういう偏屈な心が必要だと最近益々思う。だから「常識です」とか「仕方がない」「話にならない」とかいう都会の若者達のものしり顔に、「こんな軟弱に、国土を語ってほしくない」と怒ることが多くな

った。3月末、20数年來の友人である脚本家Y氏と奄美諸島へ久々の取材旅行に向かった。3泊4日で10人あまりの猛者たちに力強い話を聞いた。平均年収は2百万足らず。中央から遠い島の暮らしは石油の値段が左右する。確かに国の特別補助がある。が、貧しいことは変わらない。

それが奄美の常識だ。島の医者は、都会の医師程簡単に患者から逃げられない。悩むが、諦めない。諦めることは故郷と一緒に自分の誇りを捨てることだからと言う。無理や不便、非常識は、地方には山ほどある。情のある生きる知恵も山

ほどある。

取材旅行の最後の夜、南端の猛者と北端の小子が、諦めない誓いを酌み交わしたが、「北は寒いから生きるにも金がかかる」と心配されたのは、負けたよう

悔しい。さて、TVは中央の常識はよく伝えたが、厳しい時代に生きる知恵は、伝えてこなかったらしい。

ファイレンツェの壁画

テレビ金沢・中崎清栄

土や草のにおいを求めて能登通いが専門の私どもが何とお洒落なイタリ

ア・ファイレンツェの石畳を歩いています。金沢大学がサンタ・クロッチェ教会の大

作フレスコ壁画「聖十字架物語」の修復を教会と修復研究所の3者で進める国際貢献事業の取材です。

イタリア美術史が専門の宮下孝晴金沢大学教授に日本の篤志家が「壁画を修復して」と大金を託したことから私どもまで夢物語。教授が選んだ14世紀のフレスコ壁画の修復が進むにつれて気高く透明な女性の肌の美しさがはつきりし、今は無名の画家、アーニョロ・ガタイーが描いた壁画に近いうち行列が出来、美術史を変えるかも？です。

更に：

長年のコンビ、構成兼撮影担当の辻本昌平さんが書いたシナリオが昨年の秋、日本放送作家協会の創作テレビドラマコンクールで大賞の栄誉、来春にNHKでドラマ化されることになりました。

ふって湧いたような話：：
こんな華やぎってあるんですね。

私の口出しも加味された「まいど23
8号」ドラマになったら見てくださいな。

「放送人句会」野次馬記その1

新村 もとを

何年前か前、銀座は泰明小学校横の路地
奥のバーで松尾羊一（馬笑）氏がポツリ
と「鶴橋がね、ロケの合間に詠んだ俳句
を時折（『放送人の会』へ）寄せてくれる
んだけど、これが中々良いのよ。それで
ね（『放送人の会』の中に句会を立ち
上げたいんだけど」と呟いた。

『放送人の会』に参加したものの何の
貢献も出来ず、一寸思い悩んでいた者と
しては直ちに賛同し、宗匠役の西川章
（阿舟）氏に協力を申し入れた。

かくして 平成十九年三月「第一回放
送人句会」が発足し、石橋冠、伊藤雅浩
（視郎）、今野勉、堀川とんこうの各氏
などが結集して下さった。

提出句は

春雨の音に目覚めて脚さぐる とんこう
青き踏む若き女優の半ズボン 視郎
訳ありの二人春雨傘のうち 阿舟
空を切る燕の群れに嫉妬して 馬笑
脚結びいっそ死なうか春の雨 もとを
と云ったお色気路線の句が多く、僕は
「情痴句会」と呼んだのだが、阿舟氏
は会報には婉曲に「傾向俳句」と報告し
ていた。

「第二回」には 初の女性会員として

中村芙美子（フミ）氏が参加。
かといつて別るもならず鱈を釣る 勉
さくらんぼ子無き女のひとり言 フミ
ひとり身のきす焼く庭に猫二匹 冠
などの句が詠まれ「傾向俳句は続いとる
な」とは 某会員の言。

「第三回」には、大山勝美、橋本潔の
両氏が加わって呉れて

月光に枯れあぢさゐのすこみをり 勝美
忸怩たる顔そのままに胡瓜揉み 潔

大分 句風が変わって来た:

【続く】

「テレビの青春」

萩野 靖乃

今野勉「テレビの青春」を読んで、久
しぶりに熱い思いにひたつた。

私は、1961年NHK入局である
が、あの頃は民放もNHKも全く同じ
なんだなど知って感動した。

仕事はめちやくちやに忙しかった。月
に1日か2日休むのがやっとであった
ろう。過酷な仕事であったのに、文学青
年、映画青年、演劇青年（くずれ）達は、
夜明けまで飲んでた。

この新しいメディアで、何か新しいも
のをつくってやろうという自負だけは
あった。しかし、上司とは常に折り合い
がつかず、提案は殆ど落とされつづけた。
ものの考え方が全く違うのだ。安楽闘
争を経て入って来ただけに、私どもも突
っぱっていた。

とにかく生意気な若ものたちであつ
たことは間違いない。このあいだ見た
村木さんのフィルム番組にも、あの頃の
「独善」と「居傲」を感じとり顔が赤ら
んだのであるが、今頃になって、あの時
代がなつかしく感じられるのは何故だ
ろう。「クリエーター幻想」のようなも
のが、私の中にまだ残っているのだらう
か。それともボケ老人のセンチメンタル
な懐旧のせいだろうか。

第11回 放送人の世界

村木良彦と作品

2008年の「放送人の世界」は当会
の幹事で昨年1月に亡くなった村木良
彦氏の人と作品を取り上げた。



村木氏がTBS時代にデレクターを担った作品は、萩元晴彦氏との共同演出「あなたは」

「あなた」などを除けば、1967年夏から翌
68年1月にかけて連続的に制作・放映さ
れた4本のオール・フィルム・ドキュメ
ンタリーしかの残っていない。

今回は、その4本と、トウデイ・ア
ンド・トウモロウ社長時代に演出したビ
デオによるドキュメンタリー「トリニテ
イーの記憶」を2日間にわたって上映し
た。

3月14日（土）

「わたしのトウイギー」

「フーテン・ピロ」

「クール・トウキョウ」

3月21日（土）

「私の火山」

「トリニテイーの記憶」

2日目のゲスト、前川英樹氏。

司会、聞き手は両日とも今野勉。

初回の3本は1967年の夏から秋
にかけての作品で、村木自身が「アクシ
ョン・フィルムミグ」と「コラーージュ」
と名づけた方法によるドキュメンタリー
で、いずれも、東京を舞台に一人の少
女の心象風景を断片的映像の組み合わせ
せ（コラーージュ）によって表現している。

村木自身がアクション・フィルムミグ
とは何かについての説明を一切してい
ないので、その意味についての推測を今
野は試みた。電子的映像による「時間」
を手法にしたそれまでのドキュメンタ
リーと一変したフィルムによるドキュ
メンタリーで村木氏は何を目指したの
か、という大きな謎は、そう簡単には解
ける謎ではなかった。

2日目の「わたしの火山」は、村木氏
の配転の契機となった作品だが、前3本
とまったく手法、テーマとも変わってい
ないのに、なぜこの1本だけが問題とな
ったのか、などについて、語り合った。
ゲストの前川氏は村木配転後、個人的に
最もひんぱんに村木氏に会っていたひ
とりだが、多くを語らない村木からその
心理の深奥を聞きだすのは難しかった
ようだ。

「トリニテイーの記憶」は、アメリカ
の原爆開発にたずさわった技術者を父
に持った娘が、父はどのように原爆開発
にかかわった
のかを辿るド
キュメンタリ
ーで、素材と
もいえるテー
マ設定の作品
とオールフィ
ルムによる作
品の落差の間
に、村木自身
どのような人
生の軌跡があ
ったのかを推
測して、会を
終えた。



研究セミナー 第1回

ドキュメンタリー・ワールド

「三丁目のドキュメンタリー」

日時・3月28日(土)

場所・放送ライブラリー映像ホール
案内役

桜井 均 (NHK放送研究所主幹)

ゲスト講師

吉永春子 (現代センター代表)

萩野靖乃 (NHK元NS(べ)部長)

お待たせ！桜井均チームのドキュメンタリー講座の開講である。世相を反映し、テレビでもドキュメンタリーへの関心がわかにか高まっているが、その手応えが聴講者の数にも現れた。60人定員に倍以上の申し込みがあった、3割ほど歩留まり見込みの数の入場券を配ったところ、殆どの入場者が来場。関係者も入られて補助椅子で通路も埋まる盛況。まずは上々のスタートとなった。



桜井 均さん

「三丁目のドキュメンタリー」とはヒット映画のタイトルのもじりで、東京は向島育ちの戦後つ子・桜井均の、半分は町ノスタルジー、半分は映画のキレイゴトへのアンチテーゼを表している。つまり、講座のテーマは、半世紀前の1960年代、安保闘争から大阪万博までの戦後復興の時代」を、当時のNHK看板番

組「日本の素顔」や「ある人生」枠の作品を教材に、自分史とも照らし合わせるから振り返ってみようという趣向なのだ。

ナビゲーターは、長年「NHKスペシャル」で活躍し、今は放送文化研究所(主幹職)でアーカイブス活用研究も主導する桜井氏自身。配するゲスト・コメンテーターは、元NS(べ)部長の萩野靖乃氏と、TBSドキュメンタリーの伝説の紅一点・吉永春子(共に当会員)。



萩野靖乃さん

60年代は、吉永女史が実作者、萩野氏が視聴世代、桜井氏が暮らしの実感世代と、まさに鉄壁の講師トリオである。

桜井氏が選んだ教材は、「日本の素顔」から『臨時労働者』(60年12月4日放送)と、「ある人生」からは『なにわ節説法』と少年たち(65年5月9日放送)の2本。前者は、三池炭鉱争議の「総資本対総労働の対決」が象徴する時代の「非正規雇用」の実態を、後者は町工場経営者のユニークな非行少年補導の人情斬を、時代色豊かに描いてセピア色の感傷へ誘う。が、驚いたことに、問題の本質も対策も、半世紀前と今と少しも変わっていない。一体、日本の政治や社会はこの50年間何をやっていったんだ！とガク然とする。

講師3氏の懇切な体験論的解説は面白く、中でも吉永女史の臨場感あふれる

講談調熱弁に会場が沸く。技術的な新発見では、「日本の素顔」が旧式カメラと音声操作のロング・ショット映像主体に対し、「ある人生」は新型高性能カメラ(オリコンかエクレール?)によるクローズ・アップ多用で、映像音声共に鮮明。技術の進化と訴求効果の関わりに、今更ながら感じ入る。



吉永春子さん

また、桜井氏考案の「実験」で、吉田直哉作品を例に、ナレーションの有無による映像訴求の差異が試され、大いに興味を引いた。桜井氏はサラリと流したが、これはジャーナリズムの本質論にも発展する、肝の冷える着眼であった。



会場風景

テレビには、草創期は社会を覗く「窓」となり、今は時代を映す「鏡」といわれているが、果たしてドキュメンタリーは力となり得ているかどうか。課題も論点も多い。回収したアンケートからは、好

感度、期待度共に高く、さて次はどの手でいこうかと、催事終了後恒例の地階「さくら水産」での有志酒宴はにぎやかだった。(鈴木典之・記)

ミニシンポジウム

「警官の血」直後の

鶴橋康夫氏を招いて

2009・3・7

テレビマンユニオン会議室

世話人 石井清司

顔には「時」がある。1年耐えてこの日の「顔」をもらった。名匠の総見である。人情家の彼は約束を守った。色気、説得力、韜晦世代。故久世光彦はそれはオレだというかも知れない。芸術祭、芸術選奨、文部大臣賞、放送文化基金賞、紫綬褒章と賞を総なめにした。テレビをひとつの分野と言わしめた。

鶴橋のなかにいつも久世がいる。素足にスニーカーの久世は、サングラスの鶴橋をカノックスに誘ったが両雄はあいまみえなかった。しかし、鶴橋は久世をまぶしそうに見ていた。鶴橋は撮ることだけに専念した。

久世は鶴橋をゴルフに誘い、土砂降りの中、1打ずつ、アから始めて70曲以上を歌い続けた。「雨降りお月さん」「雨あめ降れふれ」「あんどきやどしやぶり、雨んなか」。

二人は仲がよかった。

傍に村木良彦がいた。

そんな思い出話を、キラキラと思いつくまま3時間語ってくれた。

第十二回放送人句会

◇平成二十一年二月十八日(水) ◇於：麦屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、豊田まつり、新村もとを、堀川とんこう、松尾馬笑、山県ぼん太、西川阿舟

◇不在投句：田澤風車

◇兼題：冴返る、若布、異動
 落の薑異動あるならどこへでも とんこう(◎視、慶、ま)

海女小屋に卓袱台一つ若布汁 ぼん太(◎慶、◎と、◎馬、視、舟)

異動の季位牌を包む捨頭巾 もとを(◎ま、と)

古傷に一語刺さるや冴返る まつり(◎も、慶、馬、舟)

時化あとの浜に若布を拾ひけり 阿舟(◎ほ、慶、と、馬)

塞翁が馬と異動の梅見かな 慶人(◎舟、ま)

胴までも波間に沈め若布刈舟 もとを(視)

夢殿の上に昼月冴返る もとを(視、ぼ)

割られたる鬼の面や冴返る ぼん太(視、馬、舟)

風渡る浜は総出の若布干し オリオン(視、も)

渦潮に鍛へられたる若布かな 阿舟(慶)

乗り過ぐす終電の音冴返る 馬笑(慶)

熱爛に誘い異動の内示など 視郎(慶、舟)

若布採る地殻変動観測所 視郎(ま)

椒廊の鼻の冷たき飯の通夜 とんこう(ま)

昇進も配転もなく春立ちぬ ぼん太(ま、馬)

椿落つ覚悟三分の官仕へ 馬笑(ま、も、と、ぼ)

和布刈神事関門橋脚下 まつり(も)

冴え返り差らふほどの梅二輪 馬笑(も)

若布洗ふ指の白きに夢のあと とんこう(も)

善哉や二月の異動機に別れ まつり(も、と)

若布切る海賊の首二つ三つ 風車(と)

土曜日の若布ひろがる水の桶 まつり(と)

冴え返る異動内示の酒の席 風車(馬、ぼ、舟)

【注】
 作者名の下()の中は選者名。

視||視郎、慶||慶人、ま||まつり、も||もとを、と||とんこう、馬||馬笑、ぼ||ぼん太、舟||阿舟

第十三回放送人句会

四月十五日(水)、兼題：若葉、山葵、ガリ版、
 の記録は次号掲載。

第十四回放送人句会

六月十日(水)、兼題：短夜、日傘、配車

新入会員・入会ご挨拶

ドラマを真摯に

兩宮 望

はじめまして。兩宮望です。アメリヤ、ノゾム、が戸籍名ですが、アマミヤ、ボウと皆は言います。あのオバマ大統領の愛犬の名と同じです。名誉なことです。アチラはスペインの何とかという血統種ですが、ボクは雑種で野育ちのテレビドラマディレクター、その場限りの現場主義で30年余、今は日テレのシニア年契社員です。

「60歳を過ぎた熟練技術者が自ら作業員になり下がっている、君のことだ、」脚本家の竹山洋さんが怒鳴る、この人すぐ怒る。「君は若手に技術を伝えているか?、若い局員は視聴率しか言わん、それだけだ、テーマ、テスト全てが視聴率からの逆算、ベテランは技術を伝えなきゃ」電話で若いPが彼を怒らせたようだ。

「60過ぎたらもう熟練、それを若手に伝える技術や仕組みを考えて、根付かせないとドラマ終わりだよ、拘ってモノつくろう、流れ作業でドラマ作るなよ、君もディレクターというただの現場作業員なのか?」

心が痛んだ。昨今、作業員になり下がった自分に気がついた。改めて真摯にドラマを見つめ直してみたい、自分

がやってきた放送文化とは何か。何を心のよりどころにするのか?

そんなある日、「放送人の会は、人生の師、になると思うよ」。

敬愛する石橋冠さんが囁いてくれました。再びの「はじめの一步」です。勉強させてもらいます。

ネズミ年の山羊座。好きな言葉、「あしたやろうは馬鹿野郎」。

ふつつかですがよろしくお願ひします。

クロスメディアディレクターとして

武本 宏一

このほど出版された「テレビの青春」(今野勉著)に目を通していたところ、なんと当時TBSラジオのディレクターだった私が一九七〇年、創立を目前にしたテレビマンユニオンに、尊敬する故萩元晴彦として宝官正章両先輩から強く参加を勧誘され、TBSを退社してユニオンに加わるいきさつが記されていました。

一瞬私の脳裏には、テレビマンユニオンでの三年間、そこから枝分かれしてしたTUC(後のテレコムジャパン)での三十年余りの様々なシーンが走り抜けました。テレビマンユニオンでの海外取材クイズ番組の原型となった「クイズジャンボ」(TBS系)の原案と取材、小型ビデオシステムENGを初めて駆使した音楽ドキュメンタリー「地球は音楽だ」(テレビ朝日系)の企画・演出、そして今なお続くミニベルト「世界の車窓から」のグラ

ンドプロデュース・・・。

テレビだけでなく、私はTBSラジオを始めFM東京など、多くのAM・FMラジオの番組制作にも深く関わってきました。こうした放送人としての私を、自分では「クロスメディア・ディレクター」と規定して、行動してまいりました。

そして、こうした多様なメディアで出会った素晴らしい方々が、今も私の大きな財産となっています。

構成 久野浩平

今回は草創期をへて60年代に入って活躍したディレクターたちの証言です。皆さんはテレビ放送が始まって4、5年後に放送人の道を選んだ点で共通しております。

まず 斎藤暁山 さん。斎藤さんは一九五八年NHKに入局、経理部に配属されたが制作現場を熱望、一年後ラジオ制作へ。演芸担当なのに講師をナレーターに起用してラジオドラマを試みたりするほどドラマ好きでした。62年テレビ制作へ。『花の生涯』のアシスタントから『事件記者』『おはなはん』の演出を担当、67年『文吾捕り物絵図』では交替演出の和田勉さんの得意技アップの手法に刺激を受けました。70年『七人みさき』、72年『北越誌』と秋元松代さんとの出会いは忘れられない思い出です。ゴゼの世界を描いた『北越誌』は初のオールフィルムによる自信作でしたが「言葉刈り」に会い、芸術祭賞を辞退することとなります。その経緯や二〇〇六年にアーカイヴで放送に至る事情が詳しく語られます。

「証言」はさらに『国盗り物語』『春の坂道』『花神』など数多く担当した『大河ドラマ』に及びます。企画、演出、プロデュースなど様々な立場で関わった斎藤さんの該博な大河ドラマ論の展開です。

「大河チームを組むときは、どういう資質を組み合わせるか(中略)どこに一番心を砕くかですが、必ずしもそれがうまいチーム作りでないことが結構あるんですよ。作品のグレードがなかなかうまくいかないというか」

大野木直之さんは58年開局を前にしたフジテレビに入社、芸能部へ。

『オトナの漫画』『三行広告』などを担当、63年『嫁ぐ日まで』シリーズがドラマ演出の初仕事でした。67年『シロノギ劇場』、続けて『女の劇場』などシリアスドラマと女性ドラマを数多く演出。「証言」では、共同演出に招いた宇野重吉さんの4日間40時間に及ぶ猛稽古の体験、三島由紀夫原作の文芸ドラマ『春の雪』の演出で吉永小百合と市川海老蔵のラブシーンが物議を醸した話など興味ある話題が次々に語られます。77年、その後10年以上続く「平岩弓枝ドラマシリーズ」のプロデューサーとディレクターを担当し、『女の足音』『女の旅』『午後の恋人』など話題作が続きます。海外渡航自由化のおかげで海外ロケを数多く試みたのがこのドラマの特徴でした。

「シシリー島ロケでは観光局長つてのがマフィアの親分で、これがねえ、当時ニューヨークのマフィアが捕まっていた影響でせいもつかまっちゃった。代わりの観光庁の長官もマフィアで、前のマフィアが許可したものは許可できないって……苦勞しました」

守分寿男さんは57年テレビ開局直前の北海道放送(HBC)入社。61年に芸術祭大賞『オロロン島のAD』を勤め、先輩の小南武郎さんから映像技術を習得、62年山川方夫氏のテレビ脚本『不知道』を演出。炭鉱に徴用された中国人の逃走を描くドラマで渾美清さんの主演でした。異色の作家としては67年、安岡章太郎のこれも唯一の脚本『わかれ』があります。積丹半島の中継車ロケで主演は佐分利信さん。守分さんは「東芝日曜劇場」の演出や

プロデューサーを数多く担当しましたが、「証言」の中心は72年『風船のあがる時』にはじまる倉本聡さんとの出会いです。73年『ばんえい』74年『りんりんと』『うちのホンカン』シリーズなど、共同作業は約10年10本以上に及び、結果、倉本さんは北海道に移住してしまいます。『りんりんと』は田中絹代、小林桂樹主演、苫小牧→東京間のフェリーに中継車を積み込み、その往復時間内で撮影するという大胆なVTRロケのドラマでした。

「北海道は空気がいいし、絵がキレイに仕上がりますからね。夕に撮るとね、自然の書き割りの前で人間が芝居しているとハッキリ分かってしまう(中略)。結局望遠レンズでその辺りを撮る。ワイドだと背景ともども絵ハガキみたいになっちゃう」

滝大作さんは59年NHK入局、映画部を経て演芸班に所属、寄席中継や漫才を担当、コント55号の立ちあげにも参加しました。『ふるさとの歌祭り』で地方回りを経験した後『ひるのプレゼント』へ。多数集まった構成作家の中に松原敏春、瀬戸内晴美さんまでいる異色ぶりでした。71年『お笑いオンステージ』を立ちあげ、クレージーキャッツ、笑福亭仁鶴、てんぶくトリオなどが出演、『てんぶく小劇場』『減点パパ』のコーナーが人気を呼びました。赤塚不二夫さんとの親交も不思議な関係で『落合焼鳥ムービー』など一緒に映画を作ります。84年、自由を求めて退局、民放のお笑い番組に参加します。この頃から脚本に手を染めNHKの公開コメディ『お江戸でござる』『道中でござる』の台本や演出を全部引き受けました。滝さんの「証言」は全体

が意表をつくコメディ、コメディアン論であります。

「オカシイとは、不自然なことですよ。いまの時代、何か不自然だというのを見つけて、それをきっちり描けばね、あの、自ずからいい笑いがでてくるはず(中略)それぞれの観点でそれを見つかることだと思ってるんです」

最後は鴨下信一さん。58年TBS(当時KRT)に入社し、テレビ演出部員になります。鴨下さんの「証言」は当時の演出部の雰囲気、ディレクターやADたちの生感をユーモラスに語ります。60年、東芝日曜劇場『一枚看板』で共演した森繁久弥さんと大矢市次郎さんの俳優同士虚々実々の対決のエピソードの面白さ。百数十本に及ぶ日曜劇場や『源氏物語』、『忠臣蔵』など数々のドラマを作った鴨下さんですが、「証言」の中心は『岸辺のアルバム』に始まり『思い出づくり』『ふぞろいな林檎たち』に至る山田太一作品の回想です。キャストリングの経緯、俳優たちに要求したりアリスティックな演技などなど、裏話が詳細かつ具体的に語られます。その他、橋田寿賀子さんとの初対面、久世光彦さんとの交遊、美術セットへの思い入れ、衣装合わせの重要性など、鴨下さんならではの証言が多彩に続いてゆきます。

「本当はドキュメンタリー、ドキュメントを撮りたかった(中略)。山田太一さんとやった3つの作品はいずれも、ぼくとしてはドキュメントを作るつもりで、特に『思い出づくり』なんかは原作が下重(暁子)さんが書いた一種のルポルタージュだよね。あれが原作だから(意識して)撮ったことは間違いないですね」

第6回人気番組メモリー
『木島則夫モーニングショー』

栗原玲児 井上加壽子 外崎宏司
(テレビ朝日P) 司会 加賀美幸子
2月11日 (於 横浜情文ホール)



加賀美幸子さん

まず司会の加賀美さんはNHK時代の木島さんが民放入りを決意した事情を綿密な資料から当時の事情を語り、スタッフだった井上さん、外崎さんがこもこも当時の事情に触れる。



栗原玲児さん



井上加壽子さん

ニュースフィルムをつなぎ合わせたようなニュースしかない時代に米国の『TODAY』(NBC)を意識した主婦向けニュースワイド。「8時半です。おはようございます」の言葉ではじまる『木島則夫モーニングショー』(64年)がテレビ編成に与えた影響は計り知れない。「泣きの木島」「怒りの栗原」「しっかきもののお姉さん」と出演者の性格と役割を鮮明にし、絶えずカメラの向こう側の主婦を見つめていた演出が家庭を捉えた。会場を見渡し「この中で『木島・』を見た方は手を挙げて」と司会が促すと会場のほぼ全員が手を挙げた。当時あの時間帯を席巻した『木島則夫・』への熱い空気を改めて感じた。

まずキネコ処理でたった一本「生存」した映像(65年2月24日放送)が流れた。それは夕炭炭鉱事故を現地から栗原が電話レポートと長野県に住む帰国者家族と中国残留の肉親をめぐる話題が中心だった。まだENGなどは無く、レポートは「言葉の力」が要求された時代で、栗原の情景描写が光る。中でも当日のゲスト佐分利信のコーナーを注目した。おそらく主演の最近作映画のPRがねらいだったはずだが、佐分利信は開口一番、「わたしは北海道の炭鉱のせがれでして……」と栗原レポートに身を乗り出し、「炭鉱の事故は立て抗が煙突の役割になってしまおうの被害は大きくなる……」と空知郡歌志内村の炭鉱夫の息子だった少年時代の思い出をつぶさに語り、次いでゲストの中国残留の人達(当時は国交回復以前で残留孤児の問題意識はまだ無い)について国の責任に触れて終わるのだ。

ゲストをふくめニュース第一主義を貫くジャーナルな性格に改めて驚いた。合間の生で歌うコーナーでは越路吹雪に帰国早々の小沢征爾がゲストでアドリブで小沢の指揮で越路が唄った。



外崎宏司さん

「オールナマだからこそあんな豪華なことができたんですねえ」とPの外崎さんは述べ懐する。予定調和のコーナー割りに終始し、芸能ネタで視聴率にこだわる現状批判の結論に会場も大きくうなずいていた。(松尾記)

新刊案内

今野勉著『テレビの青春』
(2800円 N T T出版)



1960年代—
「私は肩に力が入らない(七人の侍)のワイドショー」
「隣の女(家庭)は深くへ行くまい」……
荒野を拓いてきた若者たちの夢と修羅のテレビ史

ラジオであれテレビであれ第一世代(創成期)を経て、正統と異端が混在し、めぐるめく編成の多様性を問うたのが第二世代だった。入社試験で選ばれた彼らの大半は大卒だった。まだ高値のテレビ受像機を購入した知的富裕層が期待した初期テレビの混乱を見て「電気紙芝居」「一億総白痴化」と罵倒した時代に彼らはやってきた。先行メディアである映画・演劇・演芸をなぞる「のようなもの」ではない自立する「テレビとは何か」を「ADの眼」から考えはじめ試行錯誤を続け、60年代テレビを確立した若者たちだった。

一テレビ局の内実を回顧した書といふより、同時代的な「同期」がいかにかに戦い、散ったかを紡いだビルドアップスロマン(教養小説)である。若い制作者たちにぜひ読んでもらいたい。(記 松尾)

☆新会員紹介(順不同)☆

- 加藤 迪さん (元NHK)
- 雨宮 望さん (日本テレビ)
- 武本宏一さん (元TBS)
- 永田浩三さん (元NHK)

編集後記

放送人グランプリも8回目を迎える。そもそもは亡き村木良彦さんの提案で始まった。年間を通じて放送現場でユニークな業績を残した人か、長年にわたり生涯一捕手的なスタンスで放送文化に貢献した人(および複数のスタッフ)を放送現場の先輩たちが選ぶ。

さまざまな贈賞イベントがあるが、先輩が後輩を選ぶ賞は本賞をおいて無い。芥川、直木賞も先輩文士が新鋭文士を選ぶ賞だが、放送は個人「営業」ではない。例外もあるが一般に放送局やプロダクションとの間に交わされる一定の就業規則の下に行われる創造行為であり、多様な人事展開を許容するカンパニー組織である。そこには某大学の校歌ではないが「集まり散じて人は変われど」の魅力と「去るものは追わず」の非情が同居している。「栄転」や「配転」の陰でひそかにチャンスがうかがう新鋭を期待し、あるいは裏切られる。ある人事担当の重役は「人事もロマンである」とほざいたという。しかし、われわれは「放送もロマンである」と考えたい。さらに言えば「テレビ(ラジオも)は永遠に青春である」(今野勉)ならば、「青春もまた永遠である」放送人像を夢みたい。それが「放送人グランプリ」だけが有する精神的基層だと思えます。

会員の皆さん、5月16日には是非とも参加し、総会では日ごろ感じている思いの丈を披瀝し、懇親会では久闊を叙し、談論風発の夕べとしましょう。